

令和4年度 自己評価表

<p>中長期目標 (学校ビジョン)</p>	<p>○未来に向かい 自分らしく輝き 豊かに生きる子どもを育成する。</p>	<p>今年度の 重点目標</p>	<p>○自己肯定感を高め、主体的に取り組む児童生徒の育成 ○質の高い職員集団づくり ○安全で安心な学校づくり ○「チームくらよう」の推進</p>
---------------------------	--	----------------------	--

年 度 当 初				評 価 結 果 (2)月				
評価項目	部	評価の 具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	次年度に向けた改善方策
自己肯定感を高め、主体的に取り組む児童生徒の育成	A 部門	○日々の活動に意欲的に取り組み、自分なりの方法で表現する児童生徒の育成	○児童生徒の表出や表現方法を探り、授業づくりに活かすことで児童生徒の活動意欲の向上や表現力の変容が見られてきた。 ○表出・表現方法の探り方や活用の仕方等については、その都度職員間での共有に努めているが、より効果的に進めるために、実態把握の手段や視点、分析結果の活かし方や、それぞれのニーズに応じた系統的な題材や教材についての検討と整理が必要である。	○児童生徒が自分なりの方法で表現したり、周囲の人に関わろうとしたりする姿が見られる。 ※教員の8割以上が「できた」と回答	○児童生徒一人一人の表出や表現の方法について整理し、職員間で共有する。 ○児童生徒の特性や発達段階、学習状況、生活年齢を総合的に捉えた実態把握を行う。 ○根拠のある目標設定やそれに向けた題材や教材の整理と精選を実施し、学びの積み上げがわかる指導の充実を図る。 ○児童生徒の表出や表現の方法について、保護者と情報を共有する。	アンケート回答結果:教員全員が「達成できた」「ほぼ達成できた」と回答→達成 ○職員間の共通理解については、ジャムボードを活用して課題を抽出したり、自立活動の目標シートに関わる先生方に提示したりこまめに話し合ったりすることができた。 ○児童生徒にいろいろな表現方法を伝えた。完全に習得できたわけではないが、伝えようとする姿が見られるようになった。 ○PT指導など専門機関のアドバイスを受けて、指導に活かすことができた。 ○一人一人の子どもに真摯に向き合い、会話を楽しんだり、じっくりとコミュニケーションを取るようしたりすることを心がけて対応することで、子どもたちの表出の幅が広がってきた。	A	○引き続き、児童生徒の育てたい表出や表現の状況についての一覧表を来年度の引き継ぎに向けて活用する。 ○児童生徒の実態把握については、アセスメントやチェックリスト、観察等を総合的に活用するが年度初めに整理しておく。 ○教職員同士、保護者との情報共有の仕方について整理する。 ○教職員自身の表現方法や対人援助スキル等の研修を実施する。
	B 小学部	○主体的に取り組んだり表現したりする姿へつながる指導、支援の工夫	○子どもたちの達成感や、主体的に取り組む意欲を育むため、教育活動全体を通して、子どもたちの表出や表現する学びの土壌を作っていく必要がある。	○児童が学習や生活の中で自分の伝えたいことや表現したいことを自分なりの方法で表出したり、表現したりする姿が見られる。 ※教員の8割以上が「できた」と回答 ※学習の振り返り場面の様子をとらえて子どもの変容を評価	○児童の表出力や表現力を広げるために、有効な教材等の整理を定期的に実施する。 ○学習内容や指導・支援の方法を共有し、評価・改善を行う。 ○児童の学習の様子、学習の広がりについて、保護者や関係機関と共有し、連携を取っていくことを継続する。	アンケート回答結果:教員全員が「達成できた」「ほぼ達成できた」と回答→達成 ○自分の気持ちや考えを自分なりの方法で伝える姿が増えた。 ○より良い方法で気持ちを伝えるだけでなく、相手を見て伝えることを調整する姿も見られつつある。 ○学習の中でしたいことを伝えていく姿や次にやりたいことを伝えてくる姿が見られた。自分の今の目標を知り、目標を持って取り組む姿や自分を変えていく姿もあった。振り返りなどの発表を意欲的に行い、伝え方が少し具体的になってきた。 ○ネガティブな感情もポジティブな感情も、しっかり表出している場面をたくさん見られた。 ○保護者へ通信で成果や子どもの思い、かけた目標を伝えることで共通理解して情報交換しながら取り組んでいることも増えてきた。	A	○振り返り要求場面等、児童の良さや得意なことを伝えたり、披露したりできる場面を意図的に組んでいき、さらに表現力や自己肯定感を高める学習場面を設定していく。 ○児童それぞれの主体性を育むための教材教具、単元設定や学習内容の工夫をさらに進める。指導者間でしっかりと学習や単元を振り返り、効果的な支援や学習内容の共有、また次単元や次年度に向けて改善できる点を話し合い、授業作りをしていく。 ○子どもたちの言動の見えない理由を考える。 ○本人が、どうすべきか分かり、やってみようと思える支援を行う。 ○どこまで理解しているのかを細かいステップで確認すること。 ○愛着の児童は指導が難しく、実態を情報を共有しながらさらにチームで取り組んで行く。
	B 中学部	○表現力の育成を目指す授業の充実	○教科の目標を明確にして、教科間の関連性を図りながら、授業実践の積み上げをしていく必要がある。	○生徒が自分なりの方法で気持ちや思いを伝えることができたり、文化活動において自分から進んで作品制作や身体表現に取り組みたりすることができている。 ○授業を通して、生徒が言葉やジェスチャーで「できた」「わかった」等の達成感を表現する姿がある。 ※以上の2点について、それぞれ教職員アンケートで8割「できた」と回答 ※生徒アンケートや学習の記録から評価	○学習活動を通して生徒一人ひとりにどのような表現力を育てるかを明確にし、生徒自身が自分の成長を実感できるよう、気持ちや思いを伝える学習の成果の視覚化を行う。例えば記録を教室掲示したり、ポートフォリオ評価を行ったりする。 ○前年度より新設された美術について、表現の楽しさをより一層経験するために、更に積極的な発信を行ったり、相互評価・他者評価の機会をもつ。	※教職員アンケートで2つの目標について、それぞれ8割以上「できた」と回答 ○伝え方に課題のある生徒も見られるが、個々の実態や興味・関心に合わせた題材や学習環境等を設定したことにより、自分なりの方法で伝えたり、自分から活動に取り組んだりする姿が増えた。学習経験を積み重ねることにより、生徒自身が表現することを楽しみ、意欲を持って主体的に取り組めるようになってきた。学習過程やその成果の掲示を行い、生徒同士で鑑賞したり感想を伝え合ったりする機会を設け、生徒がお互いの良さを認め合ったことで、生徒自身が自分の成長を実感し、自信につながるようになった。 ○言葉やジェスチャー、カード、学習に取り組む姿勢など、自分なりの方法で達成感を表現し、さらに向上しようとする姿も見られるようになった。選択肢の提示、生徒が伝えようとしている内容を指導者が言語化して生徒に返す、一人一発言できる機会や気持ちを聞く機会の設定、学習の過程や成果を映像で残すなど、生徒の実態に合わせて指導・支援を工夫することにより、相手に伝わる表現を引き出すことにつながった。 ※生徒アンケート 好きな表現活動がある・・・中間(9月)76%→最終(2月)% できるようになってうれしかったことがある・・・中間(9月)71%→最終(2月)%	A	○学習過程や成果等の視覚化を図るため、学習過程と成果を示す掲示物作成や作品掲示、動画を活用した振り返り等を学習計画に組み込む。 ○相手の良さを見つけ、相手への伝え方を身につける経験を積み重ねられるよう、生徒同士の相互評価の機会を設ける。 ○学習グループや学部内で、生徒の様子や学習の工夫、指導支援等について情報共有しやすい環境を作る。(機会の設定、業務の効率化等)
B 高等部	○周りの人とのやりとりの中で、自分の意思を確実に伝えることができる生徒の育成	○単一生徒は、意思を伝えることができる相手が偏っていたり、一方的に意思を伝えるのみで相手の意見を受け入れることが難しかったりする生徒が多い。新入生は、言葉や傾き、首振りなどで意思を表すことはできるが、自分から周りの人に意思を伝えることが苦手な生徒が多い。 ○重複生徒は、言葉、傾きや首振り、やりたいことに向かっていく行動などで自分の意思を表したり、複数の選択肢の中から選んで自分の意思を表したりすることができるが、自分からの発信は少ない。	① 周りの人とのやりとりの中で、自分の意思や気持ちを素直に伝えることができる。 ② 周りの人からの声かけを受けて、自分なりの表現方法で、自分の意思を伝えることができる。 ※中間、学期末に、教職員アンケートをとる。 ①②とも80%が達成と回答した場合は、A評価。 ①②のいずれかが、80%が達成と回答した場合は、B評価。 ①②のいずれもが、達成と回答が80%以下の場合は、C評価。	①・授業や生活の中で、生徒同士、もしくは生徒と指導者がやりとりする機会を多く持つ。 ・お互いの意思や素直な気持ちを尊重しながら、方向性を決める。 ②・はい、いいえで答える、複数の選択肢の中から選ぶなど、自己選択、自己決定の機会を多く持つ。 ・自己決定を尊重し、自分の意見が周りの人に伝わったという経験を積み重ねる。	① 中間(9月)達成52%→最終(1月)達成72% 学部研究で、指導者と生徒、もしくは生徒同士とのやりとりのある授業づくりに取り組んだ。授業づくりを工夫していく中で、授業の初めに生徒の興味がある話題を取り上げて話す、生徒が経験したことがある話題をランキング形式にまとめクイズを行うなど、生徒が発言しやすい授業の仕掛けを行うことで、生徒からの発言が多くなり、指導者とのやりとりが増えた。80%の目標達成は出来なかったが、学部研究での授業づくりを通して、先生方が話し合いを多く持ち、アイデアを出し合う中で授業の意識が変わったことは大きな成果だと感じている。次年度、さらに授業の話し合いや、良い取り組みを学部全員でシェアをすすめ、さらに指導者と生徒、生徒同士のやりとりを通して、コミュニケーションの力、自己肯定感の高まりを育成することができるようにと取り組みたい。 ② 中間(9月)達成85%→最終(1月)達成92% 単一、重複とも自分なりの表現方法で、意思を伝えることが達成できた背景には、高等部の先生方の普段からの丁寧な人間関係づくりが根底にあると感じている。場面緘黙の生徒や、愛着の課題がある生徒、うなづきや指さし等で意思を表出する生徒たちの思いを指導者がしっかりと受け止め、理解したことで、生徒たちが安心して意思を表出することができた。今後も引き続き、人間関係をベースに、自己表出、自己肯定感を高めていきたい。 ★①未達成②達成のため、年間、B評価とする。達成目指して引き続き取り組みたい。	B	○意思を伝える方法や、授業の中でやりとりを行う方法について、考える機会をもつ。 ○授業づくりについて話し合う機会を持つ。また、良い取り組みを学部でシェアしていく。 ○授業だけではなく、普段の生活の中でも、指導者と生徒でやりとりをする機会を多く持つよう意識することで、やりとりが自然と行えるような素地をつくる。	

様式 2

年 度 当 初					評 価 結 果 (2)月			
評価項目	部	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	次年度への改善方策
質の高い教職員集団づくり	研究部	○学習の基盤整備を活かした授業	○令和2, 3年度の校内研究で各種計画の整備やアセスメントの実施を行った。これらが授業にどのように活かされているのか教員間で学び合う機会が必要である。	○研究の日の授業公開を通してアセスメント等を授業に活かす工夫を知ることができる。 ※教職員アンケートで8割以上が「できた」と回答	○授業者がアセスメント等を授業に活かす工夫を紹介するアピールシートを準備する。 ○参観者が授業において着目すべきポイントを事前研修で確認する。	○授業者がアセスメント等を授業に活かす工夫を紹介するアピールシートを準備し、参観者はそのシートを見ながら参観することで、着目すべき工夫ポイントを明確にすることができた。 ○2回の研究の日を通して全クラスの授業公開を実施することができた。 ※96.3%の教職員が研究の日の授業公開を通してアセスメント等を授業に活かす工夫を知ることができたと回答した。	A	○本校オリジナルの授業研究の方式を来年度も継続しながら、令和5年度からは表現力の向上をテーマに新しい研究に取り組んでいく。
	教務部	○個別の指導計画の新様式の実践と検討	○今年度より、個別の指導計画の新様式を用いることとなった。本校の育てたい力「5分野の力」を柱とし、各教科でつきたい力を明示する形である。この様式をすることで、指導者が各教科の目標を意識した授業づくりを実践するとともに、児童生徒の各教科等の力の育成が図れたかを検証する必要がある。	○個別の指導計画で立てられた各教科等の目標を意識した授業づくりをすることができる。 ○各教科等で個々に設定された目標に対して、達成度や次につながる評価を適切に行うことができる。 ※教職員アンケートで8割以上が肯定的評価であれば達成	○以下の3回、学級担任を中心に様式についてのアンケートと意見集約を行い、検討をしていく。①今年度計画の立案後(6月中旬) ②前期評価後(9月中旬) ③後期評価と次年度立案前(1月中旬)	○教職員アンケートでは、指導者が各教科の目標を意識した授業づくりや適切な評価について9割以上が肯定的評価である。 ○12月に、個別の指導計画の後期と年間評価及び次年度の書き方の説明動画で、全職員に周知した。1月に行った様式についてのアンケートでは、6割の担任が書きにくさを感じないと回答していた。4割の担任は児童生徒の実態によって教科の評価や次年度の目標設定の書き方に悩んでいるが、新しい様式を継続する中で、丁寧な説明をしたり文例を示したりして、少しでも書きやすさを感じられるようにしていく。	A	○今年度の取り組みでは、指導者の授業づくりの意識の変革を行うことにつながってきたので、個別の指導計画の様式については変更をせず、各教科の目標と評価を記載する形を継続していく。 ○次年度は、各教科等合わせた指導において、教科の目標をより明確にして単元計画や授業づくりに活かせるような年間指導計画の作成を実施していく。
	全体	○時間外業務の原因把握と改善	○分掌や学部の業務に偏りが生じており、調整していく必要がある。 ○昨年度、月45時間を超えて時間外勤務する実態がある。	○日々勤務簿の自己管理を徹底するとともに、自ら改善策を考え、取り組むことで業務カイゼンへの意識を高める。 ※教職員アンケートで8割以上が目標達成のための方策を「できた」と回答	○会議をしない日やノー残業ディを設定し、計画的に勤務をする環境を整えるとともに、勤務簿の自己管理を徹底する。 ○業務カイゼンに関する職員へのアンケートを実施した結果をもとに改善策を取り組みにいかす。	○教職員の89%(中間83%)が日々勤務簿の自己管理を徹底するとともに、業務カイゼンへの自ら改善策を考え、取り組むことができたと回答した。 ○時間外勤務実態を正確に反映されるため、入力基準を見直したことも影響して、各月で時間外45時間を超えて、勤務する者が前年度に比べ増えていることは課題である。	B	○各学部や分掌、学習部等で具体的な改善策で協議し、企画会議等で検討した上で全体としての来年度の取り組みを推進していく。
	事務部	○スムーズな事務処理と課題に対する解決	○業務の遅延が一部あった。 ○年度始めや予算要求時など時間外勤務が依然として多い。	○事務室のすべての業務を円滑に滞りなく、新たな工夫を取り入れ進化するように努める。	○達成時期までのスケジュールを事前に具体的に確認し、早め早めに動き出す。 ○遅延が予想される時は、協力を求める。	○前年度までの作業スケジュール表の一部見直しをすることにより、より効率的な業務をすることができた。 ○今年度新たに担当することになった業務の引継ぎや業務進捗管理に、一部十分でなかったところがあり、調査の回答が遅れることがあった。	B	○引継書の見直しや、前任者も含めて事務室全体で普段からの声かけなど組織としての意識の啓発を行う。
安全で安心な学校づくり	健康安全部	○安全・安心への意識と体制作り	○各種訓練、研修会、ヒヤリハット等を通して、教職員の安全で安心な環境づくりに対する意識を高めるよう努めている。 ○新型コロナウイルスへの対応が必要である。 ○iPadを活用した拡大安全点検の集計方法についてシステムを整えていく必要がある。 ○地震、不審者対応などの緊急時対応に課題が挙げられている。	○児童生徒が安全な環境で学習できるよう、緊急時の訓練や安全点検、ヒヤリハットでの情報共有、課題への対応を適切に行う。 ○本校の新型コロナ対応基準及びガイドラインに則した対応をすることができるよう努める。 ※教職員アンケートで肯定的評価が8割以上。	○安全項目チェック表を活用した点検(iPad)を行う。(年2回) ○安全・安心への意識を高めたり体制作りを行ったりできるように、緊急時対応訓練などを計画、実施する。 ○必要に応じて新型コロナ関係の基準を作成し情報共有、徹底を呼びかける。また、Googleワークスペースを活用し、在宅でも情報を閲覧できるようにする。 ○挙げられている課題について事務部と連携して対応する。	○Googleフォームを活用した安全点検を夏休み、冬休みに実施した。 ○地震の避難訓練では、グラウンド側の点呼方法やトランシーバーでの報告の仕方、待機の仕方などに課題が挙げられた。 ○グラウンド側のトランシーバーの設置方法について分掌で検討し、トランシーバーを入れる箱の準備を事務部に依頼している。内鍵については、予算のこともあり新たな設置は難しいとのことだった。破損などの箇所については修理を依頼している。 ○不審者対応研修の実技は実施できなかったが、リモートでDVDを視聴後、グループで話し合う研修を実施した。本校の現状、問題点、改善点など意見がたくさん挙げられた。 ○火災の避難訓練では、煙体験、水消火器体験を行い、児童生徒が体験する機会を作ることができた。 ○新型コロナウイルスに関わる対応は管理職が中心となって行うことになったので、部としては感染予防ガイドラインに沿った対応が行えるよう日常的に働きかけを行った。Googleワークスペースは活用せず、職朝や掲示板を活用した情報共有に努めた。 ○教職員アンケートで肯定的評価が94%であった。	A	○避難訓練や不審者対応について、避難場所や訓練の方法、課題点など、職員アンケートの意見をもとに見直しを行い、次年度に引き継ぐ。 ○グラウンド側のトランシーバーの設置や内鍵については、引き続き事務部と連携していくように引き継ぐ。 ○数年、不審者対応研修が続いており救急対応の研修が行えていないので、来年度は救急対応研修を行う。
	教育環境部	○より安全・安心な教育環境	○定期的な掃除道具点検、職員作業により、校舎内外の校内外の環境整備が整った。 ○TEAS報告やエコ点検を定期的に行っているが、エコについての取り組みがクラスによって差がある。特に、水道、紙の使用量が増えている。点検内容を見直したので、結果を見て呼びかけを行っている。	○安全・安心な教育環境づくりを行うとともに、エコに対する意識が高まる。 ※職員作業の実施(年2回) ※掃除道具点検の実施(学期1回) ※水道・電気の使用量が昨年度よりも減少する ※エコ点検で◎の割合が8割以上	○年に2回職員アンケートをもとに職員作業を計画実施し、安全安全で無駄のない環境づくりを行う。 ○委員会・分掌と連携し、環境、福祉に関する啓発をしていく。 ○電気、水の使用に対する具体的なエコに対する取り組みを示し、掲示板上にTEAS報告を載せ、全校への意識づけを行ったり、職員への協力を呼びかけたりする。	○職員作業を2回計画した。夏期は全学部共通の使用場所、各分掌での担当場所、外回りを中心に行い、学部やグループのみの使用場所は、各自で別時間に設定して行った。冬期は、感染拡大防止のため、全職員が一斉ではなく、各担当場所学部で必要に応じて行なった。校内各所概ね整えられている。 ○学期ごとに掃除道具の点検の声かけ、使用していない道具の一括管理を行っているため、在庫の把握、購入がスムーズに行っている。 ○水道の使用量は9ヶ月7ヶ月、電気使用量は7ヶ月5ヶ月が昨年度と比べ減少している。冷暖房の未使用時に電源を切り、設定温度を上げすぎたり下げすぎたりしないよう呼びかけ、守られていることが増えているにもかかわらず、総使用量超過防止のため、冷暖房の電源を室温が14℃しかないのに切らないといけないような事態が頻発している。 ○エコ点検で◎が8割以上のクラスは過半数程度であった。水道の項目が◎の比率が低い。 ○コピー用紙の使用枚数が増加している。プリント教材を片面印刷で同版を多数印刷し、一人あたり毎日複数枚使用している実態がある。	B	○手洗いの仕方に重点を置き、指導の呼びかけやポスター作成を行う。 ○冷暖房の使用時に電源を切らないで済む方策を検討する。 ○コピー用紙の使用枚数が近年増加傾向にある。両面印刷やノート、ドリル等の使用の検討を呼びかけて使用枚数の削減を図る。

様式 2

		年 度 当 初			評 価 結 果 (2)月			
評価項目	部	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	次年度への改善方策
「チームくらよう」の推進	情報教育部	○本校教育についての理解啓発につながり、指導支援の連携を密にしていくなため教育活動の発信 ○ICTを活用した効率的な業務改善	○定期的にHPで教育活動について発信してきた。HPのリニューアルも行い、より分かりやすいものとなった。 ○臨時休業やコロナ感染症対応のため、長期学校に登校できない状況が起こる可能性がある。その時のためのオンライン教材の活用やオンライン授業ができる体制がまだできていない。 ○アンケート処理など紙ベースのため非効率な業務がある。	○教育活動や学校教育の情報掲載等、ホームページの充実を図る。 ※学部週1回以上のHP更新 ○感染状況を踏まえて校内においてオンライン授業が実施できるよう支援する。 ※オンライン教材等の作成、オンライン授業の配信体制作り ○Googleワークスペースの利用促進によりペーパーレス化および効率的な業務改善を図る。	○定期的に情報掲載できるよう各部門、学部で当番制にし、週1回は更新する。 ○教職員のICT研修を行い、教職員の意識を高めながら、オンライン教材作成や家庭での学習に役立つアプリの紹介、ダウンロードできるプリント教材のアップなどに取り組む。 ○各分掌業務の中でアンケートなどGoogleフォームで行ったり、ドライブやミーティングを利用するよう声掛けを行う。	○年度初めに学校ホームページにおける固定記事の掲載ができた。また、学校生活の様子をお伝えするくらようダイアリーの記事についても概ね定期的に更新することができた。学校ホームページの充実の取り組みについて86.3%肯定的な評価の回答があった。 ○教職員を対象として月1回程度ICT研修を行い、ICT活用能力を高めることができた。しかし、参加者が限られているなど今後教職員全体のICT活用能力の向上を図る対策が求められる。オンライン授業の実施について78.2%肯定的な評価の回答があった。 ○新型コロナウイルス対応状況に応じて会議や研修の分散開催やリモート開催が進みICT活用の機会が増え、分掌業務でリモート会議やドライブなどを中心にGoogleワークスペースの基本的な活用が進んだ。しかしGoogleワークスペースの活用による校務の情報化について一部の効果的な活用にとどまった。ICT活用を利用した業務改善について85.4%の肯定的な評価があった。	A	○くらようダイアリーについては、発信力の向上を図るため、学部の意見を聞きながら学部単重ごとの当番制を検討する。 ○新型コロナウイルス感染状況の悪化によるオンライン授業の実施の必要性の他、情報化の進展に対応するため、教職員のICT活用能力の向上を目指して教職員のICT研修の他、各分掌や学部、研究など学校全体としてICT活用の機会を検討する。 ○来年度は教職員のみならず、児童生徒が学習でGoogleワークスペースの活用ができるよう研修を進めていくことを検討する。
	支援部(校内)	○PDCAサイクルに基づくケース検討会の実施	○校内支援委員会等で児童生徒の情報共有をすることはできているが、具体的な指導・支援について、検討したり評価したりしながら継続的に取り組んでいくことができなかった。	○校内支援委員会では情報共有とケース検討を繰り返し行い、PDCAサイクルで指導・支援について考える。 ・ケース会議実施者アンケートで8割以上が「校内支援委員会での検討が日々の支援に役立った」と回答 ・月に1回の頻度で検討会を実施する。	○情報共有の際に、検討が必要なケースについて意見を出し合う。 ○ケース検討では、内容等に応じて参加メンバーを選出し、会の実施が負担とならないようにする。 ○PDCAサイクルで取り組めるように、校内支援委員会を中心に各会議等を活用する。	○校内支援委員会で、各学部の児童生徒の情報を共有し、学部主事等と連携しながら、必要に応じて、関係者会議やケース会議等を実施することができた。ケース会議で話し合った指導や支援が実施できるように、必要に応じて授業に参加したり、教材や支援グッズを提案したりした。また、実施状況の確認をすることで、PDCAサイクルの実施ができた。児童生徒の姿にも成果が見られ、PDCAサイクルの実施の効果を感じている。	A	○関係機関との連携の仕方が多様化している一方で、よきスムーズに連携できるよう検討していく必要がある。
	支援部(地域)	○自己理解につながる指導・支援方法の情報提供	○指導者や保護者の困惑や気づきから、児童生徒へのよりよい指導や支援について話し合い取り組んでいくが、学齢が上がるにつれ、本人が支援の必要性や現状の困りに気づいていないケースが増えている。 自分合った学びの場を検討する際に、本人の納得のもと進路決定するためにも、自分の特性や必要な支援を知っておくことが重要となってくる。	○自己理解につながる指導・支援方法の情報提供ができた。 ・教育相談 ・支援会議への参加 ・各種アセスメントの協力 ・体験学習・体験入学の受け入れ ・通級指導	○市町の主任会等で地域支援活動の案内やセンター的機能の活用について案内する。 ○教育相談の際には、必要に応じてアセスメントを実施したり、体験学習・体験入学を活用し、対象児の特性を見とり、伝える。 ○通級指導教室で活用した児童の気づきを促すための教材をclassroom等を活用し、在籍校へ情報提供する。	○教育相談の中では、自己理解につながるような情報提供をできないこともあったが、先生方の児童生徒の実態や特性をとらえるポイントや見取りのポイント等を伝えた。 ○前期に引き続き、通級指導で活用した教材をクラスルームで在籍校へ紹介をした。また、日々の通級指導の中で、児童生徒が取り組んだ学習教材を、連絡帳の交換を通して共有した。後期は、特に、自己理解を深める学習を中心に行い、退職後の生活に生かせるようなツールの作成に取り組んだ。 ○LD等専門員の相談の中では、常に、児童生徒の自己理解の大切さや自己理解を進めていくためのポイントについて情報提供を行った。	A	○センター的機能の活用について利用者側の成果や課題を知り、今後のセンター的機能の活用について繋がるよう、ニーズの吸い上げができる方法を検討していきたい。
キャリア教育部	○保護者への情報発信	○人権教育や進路に関する情報提供をしているが、受け取る側にとって学部や学年段階に合わせた情報提供が必要である。 ○コロナ禍の為、交流がなかなか予定通り実施できていないこともあり、保護者への発信ができていない。	○保護者アンケートで8割以上が「進路や人権教育・交流に関する情報発信ができています」と回答する。	○定期的なキャリア教育だより(PTA人権教育研修会・公開学習・交流関係(学校間・居住地)・進路に関する学習等の内容を掲載する)の発行(年6回) ○福祉セミナー等での保護者への事業所情報提供 ○学部だよりに学部に応じた進路情報を掲載する。 ○小・中・高等部それぞれの段階に応じた進路に関する説明をする。(学部懇談・学年懇談等)	○保護者アンケートの結果は、⑩～⑬の質問項目について8～9割の方から肯定的な評価を頂いた。 ○定期的なキャリア教育だより(PTA人権教育研修会・公開学習・交流関係(学校間・居住地)・進路に関する学習等の内容を掲載する)を発行継続中。(2月現在6回発行) ○福祉セミナーで20事業所の事業所情報を発信した。 ○学部便りでは、必要に応じた情報提供を行った。 ○小・中・高等部それぞれの段階に応じた進路に関する説明を個別に行った。(学部懇談・学年懇談等)	A	○キャリア教育便りは、今年度同様、人権・交流・進路に関する情報を掲載していく。さらに、キャリア教育参観日に関する取り組みを各学部・部門ごとに発信していく。 ○福祉セミナーで、事業所情報の発信も継続していく。	